

## 天文民俗調査報告(2017年)

北尾 浩一 \*

### 概要

2009年より天文民俗調査報告を開始してから9年目となった。2017年も、日々の暮らしのなかで形成された星名伝承を伝えている話者に会うことができた。しかし、2016年以前と明らかに異なる調査の厳しさがあり、1日歩いても全く記録できない日が増えた。どのような形で伝承が消えていこうとしているのか、また、現時点ではどのように伝えられているかを明らかにするために、2017年より星名伝承を記録できなかった地域を含めて記す。

### 1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめから40年目になった。調査を実施した地域は、「東北地方」「関東地方」「中部地方」「近畿地方」である。

### 2. 調査の概要

#### 2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は昭和4年生まれ、最も若い伝承者は昭和20年生まれであった。なお、星名とともに年中行事(十五夜等)についても調査対象とした。

#### 2-2. 調査地

2017年は、次の12箇所で開催された。そのなかの8箇所にて星名伝承を記録できた。

- ・5月…兵庫県神戸市長田区野田町
- ・7月…三重県四日市市磯津、鈴鹿市若松東、白子
- ・8月…静岡県熱海市上多賀、賀茂郡河津町見高、東伊豆町稲取
- ・9月…福島県いわき市勿来町、茨城県北茨城市平潟町、大津町
- ・10月…神奈川県足柄下郡真鶴町西浜、真鶴町福浦

### 3. 各地域の星名伝承

2017年に各地域で記録した星名伝承の概要は、次のとおりである。

#### 3-1. 東北地方

福島県いわき市勿来町の調査を実施した。昭和5年まれの漁師さんは、オリオン座三つ星をミズボシと呼んでいた。

「ミズボシ、三つの星。横になって見るとときも縦になって見るとときもある」

東からのぼるときは縦に三つ並んでいるが、高度を上げるにしたがって斜めになっていき、西の空で横になって沈んでいく。星のきらめきと天気の関係については、記憶がはっきりとしなかった。

「星がきらきらすると天気が良い日？」

#### 3-2. 関東地方

茨城県北茨城市平潟町のみで星名伝承と出会うことができた。昭和11年生まれの漁師さんは、次のようにヒシヤクガタノホシ、ナナツボシ(おおぐま座 $\alpha$   $\beta$   $\gamma$   $\delta$   $\epsilon$   $\zeta$   $\eta$  [北斗七星])、アケボシ、ヨアケボシ(明けの明星)を伝えていた。

「ヒシヤクガタノホシだって…… ナナツボシも言うよ。昔はヒシヤクガタノホシだ、あれって」

「あとは夜明け、アケノミョージョー。ヨアケボシと言った。だんだん、夜が明けてきたって」

「東の空に明け方なると、ヨアケボシ」

「アケボシが出てくると…… アケボシだね」

「ヨアケボシだ！ と言ったら、だんだんだんだん、明る

\*中之島科学研究所  
kitao@kagaku-shinko.org

くなってきたからね。アケノミョージョーだ、つてきれいな言葉で言うこともあるし……」

話者は、ヨアケボシ、アケボシ、アケノミョージョーの三種類の言葉を使った。海の上で働く者のコミュニケーションは、短い言葉が適している。ヨアケボシよりアケボシのほうが短く言いやすい。そして、標準語のアケノミョージョーを「きれいな言葉」と言った。

月と漁の関係について聞くと、「満月になると、明るくなっちゃうべ。サンマがつきわるくなる」という答えが返ってきた。

また、漁具スバルについては、星のスバルと関係がなかった。(写真下)



### 3-3. 中部地方

静岡県賀茂郡河津町では、星名伝承の記録をすることができなかった。東伊豆町稲取では、次のように2名の話者よりオオボシ(明けの明星)を記録することができた。

#### (1) 昭和9年生まれの漁師さんの話

伝えていた星名はオオボシのみであった。「オオボシが出るとね、夜明けが近いだなんて言ったけどね。ヨアサ近い。イカ釣りやったときに言ったもんだ」

いまは金目鯛専門で夜のイカ漁は行なわなくなった。星の出とイカは関係しなかったが、月の出は釣れた。「月が出ると潮の流れが変わるからね、イカが元気出したりあるんだね」

オオボシは天気がよかったらいつでも年中明け方に

出るか尋ねると、「出ますよ」という答えが返ってきた。金星は常に明け方に見えるわけではなく、宵の明星のときもある。漁師さんの「オオボシは同じ星でも大きい」という説明からも、金星が宵の明星として輝くときは、たとえば明け方の東の空にシリウス等の明るい一等星や木星等の明るい惑星が見えると、それらをオオボシと呼ぶこともあると思われる。

オオボシだけでなく、夏の明け方の三つ星等ほかの星名について伝えていないか確認をする。

(W:話者、K:北尾)

K「東のほう、大島のほうから大きな星が出ますか？」

W「オオボシがね」

K「オオボシが出るのは？」

W「ヨアサ」「いまはやいよ」

K「3時、4時くらい」

W「3時、4時には高くなってるな」

K「後か前かに3つならんだ星が出るのがありますよね」

W「出るよ。3つ星が出るさ、星がよお」

K「漁師さんのことばでなんと言っていましたか」

W「漁師言葉でなんと言うかな…… 知らねえよ」

三つ星が出るのを記憶していたが、星名は伝えていなかった。

#### (2) 昭和10年生まれの漁師さんの話

最初に出会った漁師さんと同様、星名は、オオボシのみ伝えていた。漁と関係があるのは月であった。

W「お月さん、明るいときはサンマなんか駄目」

W「イカはね、お月さんが水面に顔を出そうかというときがいちばん大量にとれる」

W「月が顔を出そうとする30分前か、1時間前くらい、そういうときになると海の水温が変化します。海の流れが変化します。そして、お月さんが真上いくとなると干潮になって、いちばん干上がるときだから」

### 3-4. 近畿地方

三重県四日市市、鈴鹿市、兵庫県神戸市の調査を実施した。

#### (1) 三重県鈴鹿市若松東

昭和5年生まれの漁師さんは、「星をあてに商売に行かん」と語りながらも、冬の星の輝き等に注意していた。

「冬は星がざらざらとするときやと風やわな」

「お月さんが傘かぶとるわ、もう雨やわな。昔から」

「ヨアケノミョージョーと言とるけどな。朝、起きると4時頃に、このくらいに上がとるわなちょうど。毎朝な。日和のよい日は。大き見えとるで。こっちにひとつ星あるけどなにぼしや知らんな。星をあてに商売に行かん」

「朝、月が上こう見えていたら、そこり(干潮)やな。月が出たところだったら満潮やな」

(2) 三重県鈴鹿市白子

台風が近づいており、調査を終えようと考えていたところ、アサリ漁から帰ってきた昭和20年生まれの漁師さんを昭和4年生まれの漁師さんが迎えにきた。

(A:昭和20年生まれ、B:昭和4年生まれ、K:北尾)

A「アケノミョージョーのことを、なんという？ 彗星(水星)か、あれ？ 朝からばーとあがってくる星さ。アケノミョージョーやな、と言うったの」

K「3つ並んで出てくる星とかありました？」

B「あー、3つ並んで出てくるわな。北斗七星は」

A「ちがうちがう。北斗七星はちがう」

A「星は見とらんでな」

思い出せないので、また、台風の接近に伴い風も強くなってきたので、やむを得ず、私から「ミツボシ？」と言ってしまった。本当はよくないことであるが、最終的には、ミツボシについて記憶をたどることができた。

B「ミツボシな」

A「夜明けに、ちゅちゅちゅと3つ見えるやつやな。アケノミョージョーのはたまわしやな。あれ、はたまわしやな。あれ、ちがうのかな。俺もあまりはっきり知らんのや」

「はたまわし」とは、三重の方言で「近く」という意味で、夜明けの明星の前に出ると語りはじめた。

B「ミョージョーの出てくるさきに、あれがぱっと輝いてけえへん？」

A「ミョージョーの前に出てくるのがな」

K「1, 2, 3と」

A「わしはあまり知らない……」

B「ミツボシ、ミツボシ言ってたわな」

昭和4年生まれの漁師さんは、カレイの刺し網をしていた昔にミツボシを見た記憶をたどることができた。

念のため、「年寄りにはミツボシ言っていました？」と確認する。

B「言ってたわな」

K「明治の人も」

B「ん」

K「ミョージョーの前にミツボシが出るのは夏ですか。秋ですか」

B「夏よな。冬はな、夜があけな漁にいかんな。寒いからな」

冬は夜が明けてから漁に行く。ミツボシを目当てにしたのは、夏の夜明け前だった。

十五夜の団子突きについて聞く。

B「月見した。団子あげて」

B「団子を子どももらってな。取ってもいいけどな。旦那衆のうちやたらくれよった。」

A「団子突きしとったものな。あれ怒られへんかったな。あまりな。夜の子どもの遊びだったな。子どものとき楽しみでな」

A「長い竹の先っぽ、ハリつけてな」

A「茶碗をこかすとおこられる。がちゃんいうて」

(3) 兵庫県神戸市長田区野田町

漁師さんではなかったが、昔から浜のことをよく知っている昭和10年まれの男性から聞く。

「ミツボシサマが、三つ星ベルトに。漁師さんの使っていたミツボシサマが、舟などのベルトを作っていた三つ星ベルトの名前になった」

「スマルは須磨からスマル。スバルでなくスマルと言っていた」

漁師さんのように星を目当てにするわけではなかったが、スバルではなくスマルという星名を伝えていて、須磨と関係があると語るなど伝承の変容が見られる。三つ星ベルトの会社名の名前も地元ではこのように語られていると知り、星名伝承が変化して新たな語りが生まれるものであることを教えられた。

#### 4. 特筆すべき星名伝承

##### 4-1. オオボシ、オーボシ

オオボシ、オーボシ(大星)とは、明るく輝くことに基づく素朴な星名であり、明けの明星、宵の明星、シリウス、こぐま座α星(北極星)を意味することがある。大星さん、大星さまというように敬称をつけて呼ぶこともある。

静岡県賀茂郡東伊豆町稲取の事例は、多くは明け方の金星を意味するが、金星が宵の明星として輝くとき、たとえば明け方の東の空に輝くシリウス等の明るい一等星や木星等の明るい惑星を意味した。

宮本常一氏によると、島根県八束郡恵雲村片句浦(現 松江市)にオーボシが伝えられており、「大きい星はすべて大星である。主として宵の明星を指してゐるが、宵の明星をトキシラズともいふ」(宮本 1942)と記している。金星が季節を知る目標にできないことからトキシラズと呼ぶこともあるものの、宵の明星を主として大星と呼んだ。一方で他の木星等の明るい惑星、シリウス等の明るい一等星を大星と呼んだ。

次に、筆者(北尾)の調査及び文献をもとに、複数の星を意味する大星の伝承を記す。

##### (1) 宵の明星を意味するケース

筆者(北尾)は、鹿児島県日置市東市来町伊作田にて、「オオボシの入り。それ(オオボシ)が水面に消えるとき、魚来た」というように、漁の目当てにしていたケースを記録した。

##### (2) シリウスを意味するケース

全天の恒星のなかで最も明るく輝くシリウスをオオボシサンと敬称をつけて呼んだ。

・兵庫県赤穂市福浦…オオボシサンいうたら、ミツボシさんのあとに出てくる星だな。ミツボシサンから約二時間遅れて出よったわな。

・兵庫県相生市…とにかく、オオボシサン。打瀬網は、時計持ったらんいうのについてはな。この星があがったら、今、何時頃やとかな。

### (3)こぐま座 $\alpha$ 星(北極星)を意味するケース

暗い星の多い北の空では2等星であっても明るく輝くように感じることから、「大きい星……オオボシ、オーボシ(大星)」という星名が形成された。内田武志氏によると、オーボシがこぐま座 $\alpha$ 星(北極星)を意味するケースが静岡県賀茂郡白濱村(現 下田市)、志太郡焼津町小川新地(現 焼津市)、和歌山県東牟婁郡太地町(内田 1949)に伝えられている。また、千田守康氏によると、宮城県本吉郡唐桑町堂角(現 気仙沼市)にオオボシが伝えられている。

筆者(北尾)が、宮城県延岡市に伝えられているオボシについて、大正九年生まれの漁師さんから聞いた話である。

「オボシとも言いよったですね。オボシね。どんな字を書くかな。ゆう(雄)とか…… 雄かもしれないね。雄、偉大な星。それとも大星(オオボシ)を短くオボシと言ったかもわからんですよ。御星(オボシ)さんみたいに敬称つけとるかな」(北尾 2002)

大星でなく雄星だったとしても明るく輝く様子を意味している。

### (4)明けの明星を意味するケース

明け方の金星を意味するケースを記録することが最も多い。

#### ・福岡市中央区伊崎漁港

「オオボシ、夜明け前のオオボシさま。オオボシが出たけん夜明けが近いね」

昔、延べ縄をやった。今頃(筆者注:調査を実施した7月頃)はチヌ。冬はカレイだった。そして、オオボシの出る頃、家を出た。

#### ・三重県熊野市甫母町

「朝方、オオボシって、オオボシあがった。夜明け前に、オオボシあがった。それ見たらもうそろそろ夜が明ける。光が普通の星とは違う」

#### ・北海道檜山郡江差町柏町

「オオボシと呼ぶ人もヨアケボシと呼ぶ人もいた」

#### ・広島県竹原市二窓

「オオボシというのが夜明けに出るのがあるわいな。それが太い。それが大きな。オオボシいうてね、絹で見たら、九つになって見えるのじゃ。絹もって見たらね、三つずつ並んで九つある星もあるんだ。絹もって見たら、九つになって見える星があるんだ」

オオボシ(明けの明星)を絹ですかして見たら、三つずつ並んで九つに見えたのである。

## 4-2. シャクゴボシ

かつて、星の和名は、身近なものであった。明治生まれの場合はある程度の確率で、昭和10年代生まれの場合は明治生まれの父親、母親から聞いた昔の話を記憶していれば、星の和名を伝えている。2017年8月、日本プラネタリウム協議会理事長の糸賀富美男氏から、茨城県出身のお母様(昭和11年生まれ)とオリオン座三つ星を見ているとき、「あれはシャクゴボシだ」と教えられたという小学生の頃の思い出を聞くことができた。

野尻抱影氏は、シャクゴボシについて日本星名辞典で、「三つ星が東から縦一文字に昇るのをモノサシに見立てて、その高さで夜なべの時刻を測ったのに由来するらしい」と述べている。(野尻 1973) シャクゴは、江戸時代の方言辞書『物類称呼』(越谷吾山、1775(安永四)年)に「ものさし[たかばかり]○武州河越にて・しやく共云常陸にて・しやくごと云」とあり、常陸(茨城県の北東部)では物差しを意味する。まっすぐに昇るオリオン座三つ星を物差しに見立てたのだった。

## 4-3. 1985年の調査との比較

1985年5月、茨城県北茨城市大津町にて、明治29年生まれ(筆者注)の漁師さんから、次のようにカノープスの星名メラボシを記録することができた。

「メラボシちゅうのが上がるというと、南の風が強いんだね。南の風が強くて、向こうが空気がすいちまうわけだね。くもってる空気を吹きとばすので、この星が見えるわけだから」

しかし、32年後の2017年に実施した調査では、全く星名伝承を記録することができなかった。浜言葉(漁村などで話される言葉)のなかでも星名は特に厳しい現実に直面していることが明らかになった。

## 5. おわりに

2017年、星名伝承の調査が困難であったが、2018年以降、たとえ明けの明星の星名伝承しか記録できなくなったとしても、調査を続けていきたい。

調査に協力いただいた話者のひとりひとり、そして、シャクゴボシについて貴重な情報を提供いただいた糸賀富美男氏に、紙面を借りてお礼を申し上げます。

### 参考文献

宮本常一:1942, 出雲八東郡片句浦民俗聞書, アチックミュージアム

内田武志:1949, 日本星座方言資料, アチックミュージアム

北尾浩一:2002, 星の語り部, ウインかもがわ

野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版